

《研究ノート》

「河井道子における xápis をめぐって」

一 色 義 子

はじめに

河井道子はキリスト教の信仰によって、恵泉女学園を1929年、今から60年前に創設した。この学園の命名について、『わたしのランターン』⁽¹⁾に「『恵みの泉である女子の学びの園』である。誰も泉を作ることはできない、それは創造主からの賜物である。わたしの学校もその通りである。生命の源から湧きあがる恵みの賜物であらせたい。」と記し、また、「恵と申す言葉も、(中略)代価を払わずに、ただで頂戴いたすありがたい御恩寵のことであります。かく此学園は神の御恵の加わった泉として、よき奉仕をするようにとの意味をもっております。」(恵泉の謂れ)⁽³⁾と記している。学園創設の趣意書⁽³⁾にも「天父の恩寵」という言葉が見える。恵み、恵みの賜物、神の恵み、恩寵、すなわち xápis をさす言葉である。

xápis は聖書に数多く見出される。ことに新約聖書に限っても実に多い。その主に新約聖書における xápis の概念と、河井道子の xápis の概念を比べてみることを通して、河井道子の思考領域の一端が明らかにされよう。

新約聖書における xápis の諸領域

恩恵とは神の働きの総体であると一般にいわれる。人間に対する神の關係の独自のありかたを表明している。ここには、神の主動性が示される。その事は、同時に神に対する人間の關係の受動性が示される。

元来、旧約聖書において、xápis に相当して考えられる語は、十指に及

ぶ様々な言い様がある。わけても普通あげられるのは、ヘーン יָרַח 神が敬虔な者（詩篇 4 : 3, 26 : 11, 箴言 3 : 34等）、苦しんでいる者（詩篇 6 : 2, 25 : 16等）を好意をもってかえりみることに、である。七十人訳では主にこの יָרַח ヘーンにギリシャ語の *xápis* を当てている。 לָחַם ラハミームは憐れみ、哀れみ、同情を含み（詩篇 51 : 3, 創 43 : 14, ミカ 7 : 9 等）、 רָחַם ヘセドは神の本質があわれみで（出エ 34 : 6）それは（詩篇 112 : 4）また恵みを施す（創 24 : 12, 2サム 9 : 1等）に用いられている。

新約聖書においても、これらの概念が含まれているが、更に、義でありえない罪ある人間に対する、神のかかわらないではおられない、神に固有な性質、そのあらわれとして、イエス・キリストによる贖罪の行為による、神の愛の表明（ロ 5 : 8）、イエス・キリストにおける神の愛、あわれみがその中心となる（エフェ 1 : 6, 7, 等）。従って、*xápis* は、赦罪、義認、聖化等キリスト教における一連の根本の思想と同じ基盤にたつ。

しかしながら、この神の属性であり、イエス・キリストの十字架と復活において、啓示された救いの本義である、*xápis* をどう受けとめるかにおいて、神の一方的な所与として⁽⁹⁾ 信仰において、受領するのみであるとされる。それは、人間自身から出る能力ではなく、人間側の行為ではなく、全く「神の賜物」である（エフェ 2 : 8）。ここにおいて、*xápis* は賜物と関連される。聖霊の働きによって、その賜物である、*xápis* を感じるものは、その *xápis* をうけた状態において、そこでとどまるのではなく、罪ゆるされたものとして、新しく創造され、神との和解の福音をゆだねられたものとして、「和解のために奉仕する任務」を授けられたと理解される。（2コリ 5 : 17 - 6 : 1）

主動的神に対して、こうして、応答をよびかけられるものとして、もっとも受動的な人間のがわの恵みへの感謝とそこから、聖霊におしだされた人間の新生なる生がはじまる。

さて、*xápis* をさらにくわしく検討していくにあたって、新約聖書の個々の用例について、分類をこころみることができよう。その場合、もっとも端的にわけてみて、*xápis* を「普遍的な恩恵」と「特殊な恩恵」に区分

する例がある。⁽⁹⁾ 前者をひろく神の恵みの結果を道徳的社会的、公正、適切、健全な諸秩序と考え、後者をキリストの贖罪からみる独自の神の恵みとして、二大別することもできる。その他にもいろいろの試みがされている。やや詳しくなるが、ここでは、新約聖書に限って、*xápis* の用例を思考領域を同じくするものと見られるものを纏めることとによって、*xápis* が含める概念をまず明らかにしたい。

1. 外から見て客観的に好意を示すとみられるもの、すなわちかたちの優美さ、優雅、美しさ、話し方の優雅さ

「いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい」(コロ4:6)

「皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて」

(ルカ4:22)

「聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるに役立つ言葉を」(エフェ4:29)

2. 主観的に判断して、与える側の恵み、恵み深かさ、親切、善意、好意、思い遣りがあらわされているもの。

「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。」

(ルカ2:40)

「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。」

(ルカ2:52)

「神はヨセフを離れず、(中略) 恵みと知恵をお授けになりました。」

(使7:10)

「使徒たちは(中略)人々から非常に好意を持たれていた。」

(使4:33)

3. 神の人間に対する好意、ことに恵みが自由と普遍性において、みられるもの。

「あなたは神から恵みをいただいた。」(ルカ1:30)

「ダビデは神の御心に適い」 (使7:46) (1ペト2:19, 20)

「神の恵みにゆだねられて送り出された」 (使14:26)

「主の恵みにゆだねられて出発した」 (使15:40)

手紙の初めと終りの挨拶

「神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」

(ロ1:7) (ロ16:20) (1コリ1:3)

(1コリ16:23) (2コリ1:2, 13:13)

(ガラ1:3, 6:18)

反対の概念

「働く者に対する報酬は恵みではなく、当然支払われるべきもの」

(ロ4:4)

「恵みによって選ばれた者 (中略) もしそれが恵みによるとすれば、行いにはよりません。もしそうでなければ、恵みはもはや恵みではなくなります。」 (ロ11:5, 6)

「律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れた。」 (ヨハネ1:17)

「律法の下ではなく恵みの下にいる」 (ロ6:15)

4. 神が罪深い人間に賜わる愛情、好意、恩寵を示しているもの。義とするものとしての恵み。

「神の恵みにより無償で義とされる」 (ロ3:24)

「恵みの賜物」 (ロ5:15)

「神の恵みと一人の人イエス・キリストの恵みの賜物とは、多くの人に豊かに注がれるのです」 (ロ5:15)

「恵みが働くときには、いかに多くの罪があっても無罪」 (ロ5:16)

「神の恵みと義の賜物」 (ロ5:17)

「罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ち」 (ロ5:20)

「恵みが増すように」 (ロ6:1)

「神の恵みによって今日のわたしがあつた（中略）わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず（中略）働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にあつた神のめぐみなのです。」（1 コリ15：10）
 「恵みによって召し出してくださつた神」（ガラ1：15）

5. 神のあわれみ、慈悲

「もう一度恵みを受けるように」（2 コリ1：15）
 「多くの人々が豊かに恵みを受け」（2 コリ4：15）
 「神からいただいた恵みを無駄にしてはいけない」（2 コリ6：1）
 「あなたがたに与えられた神のこの上なくすばらしい恵み」
 （2 コリ9：14）

6. 恵みの効果、恵みによって、もたらされていくもの。

恵みの状態

「このキリストのお蔭で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。」（ロ5：2）
 「あなたはキリスト・イエスにおける恵みによって強くなりなさい。」
 （2 テモテ2：1）
 「これこそ神のまことの恵みであることを証しました。この恵みにしっかり踏みとどまりなさい。」（1 ペテ5：12）
 「わたしたちの主、救い主イエス・キリストの恵みと知識において、成長しなさい。」（2 ペテ3：18）

恵みの証、恵みの賜物

「わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。」（ヨハネ1：16）
 「ステファノは恵みと力に満ち、」（使6：8）
 「恵みを受けて使徒とされました。」（ロ1：5）
 「神からいただいた恵みによって（中略）土台を据え」
 （1 コリ3：10）

「神は（中略）あらゆる恵みをあなたがたに満ちあふれさせる」

（2コリ9：8）

「わたしに与えられた恵みを認め」（ガラ2：9）

「あなたがたのために神がわたしに恵みをお与えになった」

（エフェソ3：2）

「神は（中略）謙遜な者には恵みをお与えになる」（ペト5：5）

「あらゆる恵みの源である神、すなわち、キリスト・イエスを通して」

（ペト5：10）

7. 助け、救いを意味するもの

「この救いについては、あなたが与えられる恵みのことを」

（1ペト1：10）

「イエス・キリストが現れるときに与えられる恵み」

（1ペト1：13）

8. 恵みを受け取る側、受け取られた好意のことを指し、感謝の思いとなる状態

「神に感謝します。」（ロ6：17）

「神の律法を喜んでいます」（ロ7：22）

感謝して、

「命じられたことを果たしたからといって、主人は僕に感謝するだろうか」（ルカ17：9）

「わたしを強くしてくださった、わたしたちの主イエス・キリストに感謝」

（1テモテ1：12）

「神に感謝します」（ロ6：17）

9. 報いの意味に受け取られるもの

「自分を愛してくれる人を愛したところで（中略）どんな恵みがあるだろうか。」

（ルカ6：32, 33, 34）

以上でも明らかなように新約聖書において、*xápis* という言葉は数多く見出され、その語彙が広がりをもつので、とても全部を網羅することは出来ないし、また用法も微妙に展開されるが、まず、代表的な領域は明らかにされたと思われる。中には、翻訳をする段階ですでにその意をくんで、適切な語におきかえられているものもあったが、現行の邦訳（新共同訳）によった。

河井道子における *xápis* とその領域

河井道子は神学者ではない。また、書かれた対象も、一般の読者、乃至キリスト教に関わりのある一般の読者である。ことに本稿では、恵泉女学園設立以後、『恵泉』誌⁽²⁾を中心に最後の録音をおこしたメッセージ⁽⁴⁾（『恵泉』誌所収）まで、（1929－1952）のものに限った。そのために所謂神学上の考察をすることは、困難であるかもしれない。しかし、一人の信仰をもって、キリスト者として、考え、祈り、生きた実際の言葉の中から、生きた神学の片鱗を垣間見たい。

便宜上、前項で分類した新約聖書における *xápis* の諸領域にしたがって、河井道子の「恵み」「恩恵」「恩寵」「恩義」を整理する。すべての領域が見出されるわけではなく、およそ、前項における 2, 4, 5, 6 の番号に相当する項目と関連づけて分類することが出来ると見られる。それに従って河井道子の *xápis* の用法を分類すると以下のようなになる。

2. の場合（主観的に判断して、与える側の恵み、恵み深かさ等）

『イエス様は漸に成長して健やかに成り（中略）神の恵みがある上に』

『神の恵みが彼の上に注がれないとしたら』（149号）

4. の場合（神が罪深い人間に賜わる愛情、好意、恩寵を示すもの）

『未完成の中に歓喜を感じ恩寵を発見し』（12号）

『私共の受けし恩恵の多大なるに驚く』（14号）

『やはり恩寵が剰余として残る（中略）神はわれらの罪の量に従ひ

てわれらをあしらひ給はず（中略）その賜る憐憫は大にして』

（14号）

『恩義とは価値なき者に無償にて与へられる「めぐみ」(中略)私の受けてゐる最大の恩恵は何である？といへば正しい清い愛なる神に属するといふこと（中略）この賤しい我らが神を代表する最大の恩典を与へられてゐる』（28号）

『永遠の生命の尊き賜物を与へらるる神の妙なる恩寵と』（42号）

『靈的な賜物即ち改心，贖罪，新生，犠牲，信仰，愛，等の最高の恩寵に対して』（45号）

『神の恩寵（中略）禍福共に神が善と見そなはれた個人，団体に，又，恵泉に与へ給ふた賜物と信じつつ』（57号）

『恩寵は足りてゐる（中略）凡ての恩恵を溢るるばかり与へ給ふ神を財宝とする者は幸福である（中略）願くば其恩寵豊かな事を常におぼえて』

『真に溢るる恩寵に浴した豊かな人』（60号）

『今日の光輝ある学校の祝福と光栄に与り得ざるこそ寧ろ大なる恩寵』（62号）

『聖降誕の歡を味ひ，その恩恵に浴し』（75号）

『神の恩恵と憐憫とにて卒業生に信仰の根が深く下ろされ』

（創立記念日）（109号）

『聖降誕節は（中略）救主イエス君が天より万民に等しく与えられし恩恵』

『尊い恩恵』（111号）

『人類が最上の賜物をいただいた』（111号）

『十字架上に捧げ給ひし事（中略）神の愛の賜物』（111号）

『かくて我等は何れの方面からも恩恵に浴すばかりで実に勿体なく』（111号）

『神の愛と恩恵とは主イエスに伝はり主イエスより我等に注がるる』

『十字架は（中略）恩寵そのものであります』

『聖書には祝福、或いは恩寵との言葉（中略）即ち神よりの霊的賜物なる信仰、希望、愛と平和等が融合して生命を豊富ならしむる原動力を意味します』（113号）

『信仰ある者には世間から見ると不幸や禍と思ふことも却って恩寵とも祝福ともなる』（113号）

『愛するものの死（中略）禍の中に神の恩寵』（113号）

『最大の恩寵』（表題）（154号）

『神が人となりてしかもみどり子となって、我々の地上に降り給ふとは何を意味しますか、神の子は私共に最大の賜物とは何事ですか（中略）聖降誕こそ最高最大の御恩寵であることを深く考へ』
(154号)

『闇の中にも光を見出し、不幸の中にも恵みを感知して勇敢に生活すべき秋が到来しました。』（『恩恵を数えること』より159号）

『如何なるいやしき者をも悔改めの涙を通しキリストによって罪の贖いを信じる者は神の子につくりかえなさいます（中略）悩み、苦しみ、悲しみ、恐れを皆感謝に変えてゆく力が与えられる』

（『恩恵を数えること』より159号）

5. の場合（神のあわれみ）

『かくも神の御恩寵が人々を通して私共に降り注がるのは感謝』
(1号)

『全く神の御恩寵が諸兄弟を通して色々の形となって私共に注がれ』
(3号)

『神の御憐み』（14号）

『内よりの芽生えに上よりの恵みが太陽となり雨となって』（15号）

『神の恩寵、友人の厚意が陽となり雨となって』（16号）

『神の賜物のみは静に音なきつゆの如くに降る』（33号）

『忙しいのは降りしきる神の恩寵の雨にてあれば』（37号）

『学園の恵まれる御話をしますが』（37号）

- 『予想し得ざりし程の恩恵が、次から次に注がれて今日あるのは何
たる祝福』（76号）
- 『溢るる恩寵』（表題—創立十周年）（77号）
- 『恵泉は今日まで有形無形に幾多の人々より恩恵を受け』（84号）
- 『神の恩恵に感謝するときには神を失望させまいと希ひ』（85号）
- 『実に神の賜（中略）賜の結晶』（92号）
- 『天の神が凡ての恵みの源泉であります』（112号）
- 『只只神の御恵みと感謝のみの証言』（113号）
- 『恩恵の源なる神に感謝の祈り』（115号）
- 『有るか無きが如き芥子種であったが生命があった故に恩恵の光や
熱や慈雨をうけて成長』（121号）
- 『凡てが恩寵溢るる記録（中略）奇蹟で始まり奇蹟で養はる』
（126号）
- 『恵泉は御恩寵にて（中略）神に感謝しつつ恵みに伴ひ責任を』
（128号）
- 『神の恩恵にて』（133号）
- 『斯く御恩ちようの太陽と慈雨に育ち』（135号）
- 『やはり神の御恩ちようが注がれる必要がある』（135号）
- 『神の御恵みが金糸の如くすべてを貫き』（137号）
- 『何て沢山の恩恵が学園に降り注いだ事であろう』（142号）
- 『将来の御恩を感謝しつつ』（145号）
- 『神の恵み（中略）が彼の上に注がれないとしたら（中略）神中心
で自己満足を捨てる、それが神の恵みを蒙る意味であり』（149号）
- 『恩恵を数えること』（表題）（159号）（1952年9月最後の記事）
- 『天与の祝福を数えてみよ（中略）天与の恵みを数えよ』（159号）
- 『思いに勝る恵み、思いに勝る平安が斯く私を蔽います事もこれ又
多勢の人々の愛の祈りの結果でありましょう』（159号）
- 『かくこの学校どちらからみても恵まれており祝され、のびゆく一
方であります』（160号）

6. の場合 (恵みの効果)

『私共はかかる恩恵を受くるに足るものとならんため』(1号)

『弟子の方が(中略)彼等如き者を選び給ひし御恩寵に感謝して』
(36号)

『神中心で自己満足を捨てる、それが神の恵を蒙る意味』(149号)

『キリストは神の恵に浴されても最後は十字架(中略)その先に復活すべて政治、権威、能力、支配の上に君臨し給う(中略)救主となられた此の栄光を』(149号)

以上河井道子においては、4と5に明らかに集まっている。いずれにしても、神の恵みが人間のすべての上から注がれ、下される。それは絶対的なものである。河井道子はあきらかにその前に、全く受動的な姿勢をもつ。

しかも、多くの場合、恵みは賜物として、確認される。この関連は特に著しい。

ところが、その最も受動的な極みから、河井道子の場合、そこにとどまらず、全く能動的な視点への転換が直ちに行われる。

上記の幾つかのケースを例にとっても、『最大の恩典』は神の栄をあらわすように、と展開し、『恩寵豊かなことを覚る』ことは、「よく走り走って疲るる事なき者たらしめられ」、恩寵に浴した人は、「他を慰める人に、他に与える人に」、また、恩恵に浴し勿体無いとおもえば、感謝として、喜んで他へ奉仕を、と視点が直ちに展開するのである。

また、5の場合でも神の憐れみに主眼点をおきながら、たとえば、神の賜物を音なき露にたとえると、直ちに、「敬虔、犠牲、友誼等、音なき賜物」というように発展する。学園が恵まれていると感謝をすると、すぐ多く恵みを与えられたものはすべてを神の栄光へ、そして、神の期待にそむくことなきよう、キリストの代表者という確信を抱き、神と偕に働く者との自覚を抱き、神の同労者にふさわしくあるように、という風に発展される。恩恵への感謝は、自発的に神の聖旨に副わんと努力するようになるように、と発想する。信仰の賜物、平和の心は神よりの賜であり、そのもとにあるものは、凡ての人の僕となれ、人にせられんと思うことは人にせよ、必要

なものは与えられると信仰するというように恵みをうけしものは、責任も普通以上にある、と自覚をうながす。学園を育てるものは、神、この思いは強く再三あらわれ、生涯最後のスピーチにおいても⁽⁴⁾、この一事を明言している。この神にすべてが発するゆえに、たとえある場合行く先が判然としなくても、『どんな場合でも愛なる神が最善をさし給うと信じ悲しみの中に喜びを生み出し』と、神による希望へと通じる。こうして見ると、河井道子の xápis は決して受領したそのままとどまらないのである。

河井道子の xápis の特色

前章で触れたように、神の主動性が、人間にとって、受動性となるが、ただ単に降り注がれるだけではなく、イエス・キリストの人格的行為とその贖罪者としての業績によって、キリストを媒介としてのみ、人間の全存在にとっての具体的、積極的、能動的な恵みとなる。この十字架の死と復活が明確に受け止められるところでこそ、恵みが現実となる。十字架は恩寵そのもの、という河井道子の信仰の明確さによって、河井道子において、xápis は、絶大に迫り、その現実感の強い分だけ、恵みへの応答が、河井道子の場合、行動へと転換される。受動から今度は能動へ、新しい運動、行動と実践へ。イエス・キリストの出来事が、その xápis を思考のなかにとどめることなしに、行動へとさそうものなのではなからうか。河井道子が恵泉女学園を創設したことも、その行動と実践はこの xápis の現実性に原動力があるといえるのではなからうか。

嘗て、河井道子は「信仰は事業である」と言ったことがある。まさに、河井道子の信仰はその根本に神のイエス・キリストにおける xápis があり、それは、河井道子をして、行動にむかわせなければおかない力である。xápis は力であるといわれる。xápis は働く。(ロ 5 : 16) 己に何ほどの価値を求めず、前提をもたず、すべてを神にあげわたした時、何ものも怖れない勇気を得、⁽⁵⁾ 聖霊の働きにおいて、「燃えるスピリット」(Flaming spirit)⁽⁴⁾ と呼ばれるほどの力に満たされたことであろう。xápis への応答はまた絶えざる祈りとなり、そこにおいて、また、新たな力が与えられ、

河井道子が繰り返し引用した「驚の如く翼をはりて、のぼらん」（イザヤ40：31）という力強い跳躍ができたのではなからうか。

河井道子の生涯をかえりみると、驚くほど行動と実践であった。YWCAの創設にかかわり、シベリヤにでかけて、自分で在外女性をはじめ、避難民の救済にあたり、中国をたずね⁽⁶⁾、北米⁽¹⁾、ヨーロッパをまわり、不況の只中で、恵泉女学園を創立し、更に、戦時中に反対されながらもそれに拘わらず類の無い女子の農芸専門学校を始め⁽⁷⁾、行動力抜群の開拓者であった。どんな闇の中でも、光を見、また信じ、神の xápis を感じ通した。単に書き記したのみならず、日常、また最後の病床にあっても、「恵み」という言葉が自然に語られた⁽⁴⁾。河井道子の生涯は、イエス・キリストによって、現実となった、神の xápis への応答として、位置づけることができると思われる。

おわりに

恵泉女学園大学が創設された今こそ、恵泉女学園の創立者である河井道子の精神について、ことに、その根底にあるキリスト教信仰について、研究を深める意味があると思われる。それは、ただ単に本学園の創立者であるというだけでなく、また、日本及び欧米のキリスト教界における名だたる指導者の一人であったというだけでなく、神の xápis にすべてを托して、勇敢に、未完の学園に神の完成のヴィジョンを抱き、キリストの愛に生かされた一人の女性として、その思想のより豊かな研究をすすめる必要があるとおもわれる。今回はまことに不完全であるが、発端として、今後の河井道子の思想の神学的研究に期したい。「恵泉」誌閲読にあたって恵泉女学園本部及び資料室の皆様にお世話になりました。厚くお礼申し上げます。